

## 平成10年度 学術研究・演奏会助成報告

### 室内楽奏法の研究——ピアノ三重奏演奏会——

斎藤 達男

タイトル 「トリオ オーバー」ピアノトリオコンサート  
日 時 1998年11月2日(月) 19:00～  
場 所 いずみホール

1992年以来、私は本学非常勤講師の五十嵐由紀子氏（ヴァイオリン）と大橋邦康氏（ピアノ）の協力を得て室内楽（ピアノ三重奏）の研究を続けている。ピアノ三重奏という編成はヴァイオリン、チェロ、ピアノの3つの楽器がそれぞれ「個」を主張する面と3つの楽器を調和させる面という対極の要素を演奏表現のなかで拮抗させるという所に妙味がある。そこに至るまでの実際面では、まず後者のアンサンブルを調和させる面、つまり音色、各楽器の音量や響きのバランス、弦楽器同士の音程の合わせ方などをトレーニングによって克服していかなければならない。そのためには何よりも長い時間を要する。私の研究の要旨はこの面を追求し、身についたアンサンブル力を基礎として各パートが自由性を持ち、それぞれの「個」を発揮するというプロセスを見いだすことを目的としている。アンサンブルの本質は音を合わせようとするのではなく、自然に合ってしまうという状況を作り出すことだと考えている。

1994年、私たちは第1回目の自主公演をいずみホールにて行なった。やはり本学の演奏会助成を受け、社会的には演奏団体の呼称があるほうがアピール度、認知度も高まると考え、「トリオ オーバー」という団体名

をつけて演奏会を開催した。この呼称は第1回目の演奏会で演奏したラベルの三重奏曲の優れた作品の完成度に感銘を受け、ラベルにちなんで彼の友人で作曲家兼ピアニストのルイ・オーベールの名を冠したものだ。

この度、第2回目の自主公演ではプログラムを次のように組み立てた。

- 1) ハイドン：ピアノ三重奏曲 第27番 ハ長調 Hob.XV-27
- 2) ドヴォルザーク：ピアノ三重奏曲 第4番 ホ短調 作品90  
「ドゥムキー」
- 3) ラフマニノフ：ピアノ三重奏曲 第2番 ニ短調 作品9  
「悲しみの三重奏曲」

プログラムはラフマニノフの大作の三重奏曲をメインに、1992年以来のレパートリーのドヴォルザークの「ドゥムキー」、そしてプログラムの色彩に対比をつけるために古典派の作品としてハイドンの三重奏曲を選んでいる。今回の演奏会の中心となったラフマニノフの三重奏曲は1996年から練習を開始した。この作品は彼が敬愛するチャイコフスキーが1893年、惜しくもコレラのため急逝した際の追悼歌である。第1回目の自主公演の折りにはチャイコフスキーの三重奏曲「偉大なる芸術家の思い出のために」を演奏しているが、この作品もチャイコフスキーの友人であるルービンシュタインの死を悼んで作曲されている。“ルービンシュタインの死→チャイコフスキーの追悼の三重奏曲→チャイコフスキーの死→ラフマニノフの追悼の三重奏曲”という流れを半ば意識し、この作品を最終的にメインに選んだ。演奏法の研究と言っても「良い演奏」という結果を出さずしてその成果を上げたとはいいにくい。その厳しさを思いながら練習は1、2週間に1度の割合で行い、8月にはヤマハ難波センターにて事前に公開の演奏をし、また桜ノ宮弦楽熟ホールを借りて録音会を行なうなど、準備には悔いのないよう全力を尽くした。演奏法の研究はステージでの緊張という試練をくぐり抜けて少しづつ確かなものが築かれていくのだと思う。演奏会を終え今後の課題を整理していきたいと思っている。

モノ・オペラ・ブッファ（一人のソプラノのための）  
——女はすてき——

門屋 菊子

- タイトル：ソプラノのためのモノオペラ

「女はすてき」

作曲：石井 敏

台本：山内 泰雄

演出：松本 重孝

若い女性           ：門屋 菊子

エンマ大王       ：山田 健司

女性コーラス    ：菊声会

パーカッション：北野 徹

シンセサイザー：小室 弥須彦

ピアノ            ：藤里 香世

- 日時：1998年11月18日(木) 19：00

- 場所：いずみホール

長い間、演じてみたいと考えていた一人オペラは約二時間近いもので、それを半分位いに縮めての上演といたしました。

シンセサイザーとの合わせは生まれて始めてのことで、バランスを考えながらの練習は緊張の連続、パーカッションは打楽器界の第一人者を、演出家は東京から今一番注目されている方をお迎え致しました。エンマ大王には、キャラクターぴったりに演じて下さった本学教授 山田健司氏 それに、本学卒業生のピアノと声楽7名の賛助出演を願いました。

## ポーランドのルネサンス・バロック音楽

黒坂 俊昭

一般に、ポーランドの音楽に関しては、18世紀以降の音楽がよく知られている。しかし、ポーランドでも他の西欧諸国と同じように、17世紀以前にも優れた音楽が数多く作られ、演奏されてきたのは言うまでもない。この17世紀以前のポーランド音楽、就中ポーランドのルネサンス期とバロック期の音楽について、その実態を調査しようと試みた。

ところで、今私たちが西洋音楽史として理解している歴史、とりわけ17世紀以前の歴史は、いずれも西欧の研究者によって西欧を中心に構築され、そこでは殆ど西欧の事柄だけが論じられている。そのことが西欧の研究者たちの意図的な方針に依るものであるか、或いは西欧の研究者が中欧や東欧の音楽事情を知らなかったために生じたものであるかは、現時点で断定することはできないが、いずれにしても現在の西洋音楽史に中欧や東欧の音楽が欠落していることには変わりはない。

今回は、ポーランドの音楽史研究の第一人者である J. ヴェンツォフスキ (Jan Węncowski) 博士に協力を戴き、ポーランド国立図書館や国立ショパン音楽院などで調査・資料収集を手掛けた。ワルシャワにあるその関係資料は膨大な数に上り、それがポーランド全土に潜むことを思えば、ポーランド音楽の豊かさに立ちすくむ思いがする。しかしそれらを整理・研究し、その成果を既存の西洋音楽史に組み入れたり、場合によってはその成果によって既存の音楽史を書き改めることによって、正しい西洋音楽史を構築することができると思われる。またそれが日本における西洋音楽史研究に課せられた一つの課題であるかもしれない。

## 自覚の現象学序説 ——回心の日本的形態——

北野 裕通

本研究は、従来行ってきたわが国を代表する宗教的人間に関する回心研究(自覚史の研究)、宗教的自覚についての一般的叙述の試み(現象学的研究)、自覚の本質的考察(身体的自覚の研究)を、現段階で一度整理し、新たな出発を期するものである。此度、「神子の自覚史——綱島梁川」「第三身体論」の二篇を新たに加えて一本にまとめ、『自覚の現象学』(行路社)として上梓した。

## 尼門跡寺院の調査と研究

西口 順子

本研究は、尼寺、ことに尼門跡寺院の中・近世史料を網羅的に調査・収集し、整理・公表することを目的にしている。

現在、尼と尼寺を対象にした研究は、古代・中世史の分野でかなりの成果があがっている。だが、近世尼門跡寺院についての本格的な研究はほとんどおこなわれていない。1994年以来、私は国文学研究資料館の現地研究員として百々御所文庫(宝鏡寺)調査に携わってきた。しかし、典籍・日記、古文書の一部のカード作成と、日記のマイクロフィルム撮影をもって終了したため、膨大な量の近世文書を眼前にしながら、続行不能の状況に追い込まれることとなった。そこで、調査を続行し、さらに他の尼門跡寺院の網羅的調査と収集をおこない、近世における尼寺の実態を明確にしたいと考え、本研究助成を申請した。研究計画として、

1. 尼門跡とその関連寺院の史料調査、目録作成、マイクロフィルム撮影

および、所蔵史料に関する聞き取り調査などをおこなう。調査予定寺院は、宝鏡寺・養林庵・光照院である。

2. 尼門跡関係史料を所蔵する関係機関（東京大学資料編纂所・宮内庁書陵部・国立国会図書館・京都市歴史資料館）において、関係資料の調査をおこなう。

3. 文献に表れた尼寺関係資料の収集。

の三点により実施することにした。

1998年4月より1999年3月まで、1. 宝鏡寺・養林庵・光照院文書の調査および目録カードの作成とマイクロフィルム撮影、2. 東京大学史料編纂所・内閣文庫・宮内庁書陵部・京都市歴史資料館において尼門跡関係文書の調査・収集、3. 中世後期文献収集、等をおこなった。

養林庵文書は調査を終了、210点あり、寺領関係文書、再興時の由緒書類を中心とする。文書目録は完成している（『紀要』掲載予定）。

宝鏡寺文書は調査を終了、中世文書約550点、近世文書約1700点、日録約200点、典籍約270点である。中世文書の大部分は京都大学文学部および国立京都博物館に寄託されており、影写本は東京大学史料編纂所にある。中世文書と近世文書の一部はすでに昭和56年に京都府が調査し、文書目録が刊行されているが、網羅的調査は1998年以後である。近世文書は大小7箱に納められており、朱印状、歴代由緒、指図、歴代宝鏡寺宮関係文書、借用証文、上臈寺関係文書などである。文書目録は現在マイクロフィルムと照合作業をおこなっている。

光照院については、現在文書箱3箱分が整理、撮影済みであるが、あらたに数箱発見されたため、調査を続行中である。尚、1999年より、文部省科学研究費をえて、光照院と奈良県中宮寺の調査をおこなっている。

成果の一部は、1998年11月21日より23日まで、国際交流基金より参加費用をえて、コロンビア大学中世日本研究所主催のシンポジウム『日本史のなかの尼寺文化』において、「近世の宝鏡寺宮関係史料について——浄照院宮理長を中心に——」と題して報告をおこなった。また、論文「近世の宝鏡寺宮——浄照院宮逸叡理長の入寺と得度をめぐって——」（蘭由香融先生古稀記念会編『日本仏教の史的展開』塙書房、1999年10月刊）を発表した。

## **Research in Progress: Japanese Students Abroad**

Teresa Cox

In the 1998 academic year, I received a special research grant from Soai University to study “Japanese Students Abroad: Cultural Adaptation and Personal Growth.” This project, which is still ongoing, has its roots in a study I did in 1993 using in-depth debriefing interviews of the first two Soai University students to take part in our official Year Abroad Program in the USA.

Study abroad is popular in Japan, and many Japanese universities like Soai sponsor their own programs in North America. However, there has been little research here on the overall effect of these programs on Japanese students, or on the process of adjustment which participants experience. There are only a few studies available in English which deal specifically with the international experiences of Japanese students, and these studies are limited. No one, to my knowledge, has looked at the cultural adaptation and adjustment of Japanese students abroad as a comprehensive process. Japanese researchers in the field of “study abroad” have tended to focus their study on analysis of specific critical incidents, or else to concentrate on developing practical training methods for overseas programs. Most studies of Japanese “*ryugakusei*” are based on rather subjective impressions and lack broad data on the actual experiences of students.

In contrast, there is a substantial body of American research going back more than 40 years concerning cultural adaptation in general (see Lysgaard, 1955; Oberg, 1960; Adler, 1975; Furnham and Bochner, 1986; and Torbiorn, 1994, to name only a few of the most notable sources). Furthermore, several projects have attempted to document the experiences of American stu-

dents abroad, and the effect of international study, using interviews (see Abrams, 1979; Hensley and Sell, 1979; Sell, 1983 and Kauffmann, Martin, and Weaver, 1992.). More recently, researchers in Canada and the USA have documented the cross-cultural experiences of North American students abroad and international students in North America using videotaped interviews ("World Within Reach", 1995; "Cold Water" 1988). These English language video documentaries are often used as pre-departure training materials for international students in North America, Europe, and elsewhere.

More research on the specific experiences of Japanese students abroad is needed. In-depth debriefing interviews (Cox, *Soai Ronshu* 1995) are one method of learning about cultural adaptation and adjustment. However, my 1995 interview project was limited to a small number of students from only one institution. An earlier study using a self-assessment questionnaire (Cox, *Soai Ronshu* 1993) looked at the personal development experienced by students in a short term summer program. Although this type of program is very beneficial, participants are not really required to deal with serious issues of cultural adjustment in such a short period. Therefore I chose to focus my next research project on students who have experienced an academic year abroad.

A broader study using more subjects, from different universities, who studied at different locations in North America for at least one academic year, was designed. It is hoped that this research will allow us to make some valid generalizations about cultural adaptation and personal growth of Japanese "*ryugakusei*". Such research should provide a better understanding of the students' adjustment process, and allow comparison with the experiences of international students from other countries. Additionally, research findings may help future participants gain maximum benefit from study abroad programs, especially if the insights gained are shared in the form of a training video or other student orientation materials.

My research project is to be carried out in three stages, only the first of



which has been completed. The second stage is now in progress. In the first phase of the project, with financial support from the Soai University research grant, I videotaped interviews with twelve students from Kansai area universities who had studied for an academic year in North America in 1998. I intended to investigate whether their experiences conformed to the “U-curve” and “W Curve” models of cultural adjustment proposed by Lysgaard, and Gullahorn and Gullahorn, respectively, and also to gather useful advice for students going abroad in the future.

The interviews took place in late 1998 and early 1999, resulting in about 12 hours of videotape. The Japanese text of the interviews was transcribed from the videotape and saved on computer disks.

I am now in the second stage of the project, analyzing the results of the interviews. After the interviews have been analyzed and key sections identified and extracted, I plan to incorporate these segments in a training film intended for Japanese students going abroad. This latter, third stage of the research plan assumes the continued support of Soai University for the project.

I would like to conclude by offering my sincere thanks to the Board of Directors of Soai University for their support of this research project.

## References

- Abrams, Irwin R. (1979). “The Impact of the Antioch Education through Experience Abroad.” *Alternative Higher Education* (3:3): pp. 176-187.
- Adler, Peter S. (1975). The Transitional Experience: Alternative to Culture Shock. *Journal of Humanistic Psychology* (15:4), pp. 13-23.
- Cold Water* (1988). Noriko Ogami, Producer. Yarmouth, Maine: Intercultural Press.
- Cox, Teresa Bruner (1993). “Soai’s 1992 Summer Homestay/Study Abroad Program: A Survey of Student Reactions. *Soai Daigaku Kenkyu Ronshu* (9); pp. 209-234.
- Cox, Teresa Bruner. (1996). “Soai’s First Year Abroad Program and the Sojourner

- Adjustment Process." *Soai Daigaku Kenkyu Ronshu* (11); pp. 33-51.
- Furnham, Adrian, and Stephen Bochner. (1986). *Culture Shock: Psychological Reactions to Unfamiliar Environments*. London: Routledge.
- Gullahorn, John T. and Jeanne E. Gullahorn (1963). "An Extension of the U-curve Hypothesis." *Journal of Social Issues* 14: pp. 33-47.
- Hensley, Thomas R., and Deborah K. Sell. (1979). "A Study Abroad Program: An Examination of the Impact on Student Attitudes." *Teaching Political Science* (6: 4): pp. 387-412.
- Kauffmann, Norman L., Judith N. Martin, and Henry D. Weaver. (1992). *Students Abroad, Strangers at Home: Education for a Global Society*. Yarmouth Maine: Intercultural Press.
- Lysgaard, Sverre. (1955). "Adjustment in a Foreign Society: Norwegian Fulbright Grantees Visiting the United States." *International Social Science Bulletin* (7), pp. 45-51.
- Oberg, Kalvero. (1960). "Culture Shock: Adjustment to New Cultural Environments." *Practical Anthropology* (7), pp. 177-182.
- Sell, Deborah Kay. (1983). "Research on Attitude Change in U.S. Students Who Participate in Foreign Study Experiences." *International Journal of Intercultural Relations* (7), pp. 131-147.
- Torbiorn, Ingemar. (1994). "Dynamics of Cross-cultural Adaptation." Reprinted in *Learning Across Cultures*, Revised Ed. Gary Althen, Ed. Washington DC.: NAFSA, pp. 31-55.
- World Within Reach: a Pre-departure Orientation Resource for Exchange and Education Abroad Programs* (1995). Canada: WSA Network.